

エッセイ

## 頭蓋骨に刻まれたもの——チベットで出会うところ・からだ・人生

小西賢吾 (金沢星稜大学総合研究所・教養教育部講師)  
Kengo KONISHI

ヒマラヤとチベット高原に抱かれた地域を訪れると、そこかしこに人びとの真剣な祈りの姿をみることができる。筆者が2005年以来通いつけてきたシャルコク地方（中国四川省アバ州）でも、朝目を覚ますと一杯の茶を飲んで僧院に出かけ、その周囲を巡拝するのが日課であった。経典が封じられた筒を回しながら、仏教徒は時計回り、ボン教徒（仏教伝来以前からの流れをくむとされる宗教）は反時計回りにめぐるのが作法である。フィールドワークの初期、まだ言葉も習慣もわからなかった筆者にとって、朝の時間は僧院をめぐりながら村の人びとの「井戸端会議」に参加する貴重なひとときであった。日本から来たのか、今日は何周回ったんだ、といった他愛ない会話を続けていると、少しずつ現地に溶け込んでいくような感覚をおぼえた。また、皆でぞろぞろ歩きながら周回を重ねるごとに、なぜこんなことをしているのだろう、なぜここまでするのだろう、という疑問が自然とわき上がってきたのである。

アジアの仏教圏では、善行をなして功德を積むことで、よい結果が得られる、いわゆる因果の考え方が広く共有されている。それは、現世利益にとどまらず、死後の行き先にも密接に関係している。あるチベットの高僧は、生きているうちに十分に死の準備をしておかなければならない、と説く。厳しい自然環境ともあいまって、チベット高原では死がより身近にあると感じた。滞在中に知人が不慮の死を遂げたという知らせを受け取ったことも少なくない。普段から因果や輪廻に親しんでいる人びとは、死を前にして一見淡々と対処

する。49日が過ぎればまた次の生が始まるのだから、と。とはいえ、身近な人を失うかなしみと、死への恐怖は、生につきまとう根源的な課題として重くのしかかる。だからこそ、人びとは日々の祈りの中で、

現世と来世の幸福を切実に願っているともいえる。

筆者は当初、人びとのいわゆる「篤い信仰心」をこうした因果モデルから理解しようとしてきた。よいこと、具体的には祈りや儀礼、利他的な行為などがよい結果をもたらすという説明は、一見クリアであるが、どこか「きれいすぎる」印象もあった。フィールドでの経験を重ねるにつれ、地域社会の複雑な人間関係や、現地と自分をつなぐさまざまな「縁」を実感することになったが、それははたして善行だけで説明できるのか。そうした疑問を抱えながら聞き取りを重ねる中で知ったのが、「トパリモ」（「頭蓋骨の絵」という表現であった。トパとは頭蓋骨、この場合、とくに額を指す。人生で起こることは、すべて額に刻まれている。よいことも、悪いことも。誰と出会うか、どのような仕事につくか。思いどおりにならず苦しいときは、「がまんしろ、トパリモだから」と慰める。その絵は、「ナム・ゴンポ」（「青



僧院を巡拝する人びと

空] すなわち天が描いているという。ある僧侶は、これはボン教的な考え方だと説明する。

これは、単純な運命の決定論ではない。どんな絵が描いてあるのかは、特殊な占い（「モ」）の技術を持った者のみ知ることができるという。そして日常の行動や儀礼によって描きかえられる可能性があることも示唆される。しかしいつ描きかえられるか、儀礼に本当に効果があるのかは誰にもわからない。よいことをしても報いがないかもしれないが、その時は額の絵のせいだと考え、それが少しでもよく描きかえられることを期待して日々を生きる。それは、ボン教と仏教が複雑に混ざり合い、こことからだへの精緻なまなごしを伝えてきたチベット文化の側面を端的に示すとともに、ヒトが未知の未来に自己を投じていくスリリングな現場でもある。